

いま伝えたい

被爆者から

触れてはいけないこと

私の生まれた育った旧大野町は、広島市から20キロ以上も離れた、宮島を望む瀬戸内海ののどかなところでした。そんな町に住む人びとにも原爆の傷は深く残っています。

兄がお見合い相手から被爆者であることを理由に断られたことを「触れてはいけない」として子どもながらに胸に納めたことや、「被爆者同士の夫婦だから、子どもはつくらない」と言っている近所の大人たちの話に耳をそば立てたことなどの記憶が、今になって次つぎとよみがえってきています。

〈29〉 兄の被爆体験を絵本に、「署名」推進へ

東京被爆二世の会副会長 山田みどりさん(67)



被爆の実相を伝え、核兵器のない世界を実現することが「二世」の使命と語るみどりさん

私の家では、父親と2人の兄が被爆しました。いとこたちも原爆で亡くなっています。

父と2人の兄が被爆

1945年8月6日、父は、当時町役場の職員でした。広島市に落とされた新型爆弾で町の多くの人たちが被害を受けたので、救出に、その日から1週間広島市に通いました。

残留放射能で被爆した父は、被爆後に生まれた私への影響を大変心配しておりました。私が34歳で乳がんになったときにも、父はとても悲しんでいたと父が亡くなってから聞かれました。

長兄は徴用で広島市内の軍需工場で働いているときに、中学1年の次兄は、今、平和大通りと言われているところで「建

物疎開」の作業中に被爆しました。「建物疎開」

とは、防火帯をつくるために建物を取り壊す作業で、中学生や女学生が学校ごとに動員されていたのです。いとこたちもこの犠牲になったのです。

被爆二世として

次兄は、一緒に作業をしていた多くの級友を失うなか、一人、九死に一生を得たのです。

しかし、そのことで兄は生涯苦しむことになりました。私は、兄の被爆体験とそれを背負って生きてきた「長い道」を昨年、『ヒロシマの少年じろちゃん』という絵本にしました。やさしい言葉と絵で、子どもたちに核兵器の惨さを伝えたいと思ったからです。

これまで被爆者のみなさんが思い出すのもつら

い体験を証言してきたことが、ヒロシマ、ナガサキ以降、戦争で核兵器が使用されなかったのだと心から敬意を表します。そうした活動をされてきた被爆者のみなさんの平均年齢は80歳を超えました。

被爆者の一番近くにいる「二世」の私たちができることは、被爆者のみなさんと同じような被爆証言はできないけれど、被爆者である親や、きょうだいの苦悩、閉ざされた人生を語ることはできると思います。

絵本と署名用紙を手

いま「ヒロシマ・ナガサキの被爆者が訴える核兵器廃絶国際署名」が各地で展開されています。「後世の人びとが生き地獄を体験しないように、生きていく間に何としても核兵器のない世界を実現したい」の思いを受けとめて、一人でも多くの人に広げていくことが「二世」の私の使命なのです。

昨年11月に結成された「ヒバクシャ国際署名東京連絡会」の事務局の一人として貢献できればと思っています。『ヒロシマの少年じろちゃん』の絵本を片手に、もう一方に署名用紙を持って街のすみずみに飛び出します。